

京都大学

生態学研究センター・ニュース

No. 19

## — 目 次 —

国際シンポジウム報告 東 正彦	1	大学共同ゼミナールのお知らせ	9
1993年度(平成5年度)京大学生態学研究センター 集中講義&セミナー募集要項	3	トップダウンアプローチを旨とした人 三浦泰蔵さんをしのいで	10
センター員の紹介	4	information	11
1993年度センター研究会報告	5	編集後記	11
1993年度公開実習報告	7	今後のスケジュール	12
京大学生態学研究センター研究会のお知らせ	8		

## 国際シンポジウム報告

Biodiversity 研究が生態学の新展開を促す

- 国際シンポジウム「生物多様性の生態学的展望」を終えて -

東 正彦

京都大学 生態学研究センター

地球環境問題が大きく次の二つからなることはいまや世界的な共通認識であろう。第一は、酸性雨(霧)、毒物汚染からオゾン層破壊、温室効果による温暖化といった、物理環境の悪化であり、第二は、生物多様性の喪失である。生物多様性の喪失は、人類出現以来急激に加速化され、現在最大の勢いで進行中のプロセスである。このプロセスがどういうことを意味するのか、どういう影響をもたらすのかについては、さまざまな側面について検討され議論されてきた。ひとつ確かなことは、その意味・影響がはかり知れないほど大きく、考慮が進めば進むほど重みがどんどん増していく、ということである。生物多様性の喪失の原因についてもさまざまな角度から議論検討されてきた。ひとつ確かなことは、その主たる要因が人間による野生生物の直接的消費ではなく、人類の人口爆発と活動がもたらす生物の生息環境(ハビタット)の破壊であることである。しかし、生物多様性の喪失がもたらす結果・影響の問題にしろ、それを引き起こす原因・機構の問題にしろ、最も直接的に係わってくる研究分野は生態学において他には考えられないだろう。この12月5日まで行われた生物多様性に関

するシンポジウムに参加して、筆者はこの点、ますます確信するようになった。

そのシンポジウムとは、1993年12月1日から5日までの5日間、京都の国際会議場で開かれた、国際シンポジウム"Ecological Perspective of Biodiversity" (生物多様性の生態学的展望) のことである。

このシンポジウムのテーマは、ひとことで要約すれば、"Ecological Causes and Consequences of Biodiversity" (生物多様性の生態学的要因・機構および結果・効果) ということにあった、と思われる。このテーマは、シンポジウム企画を手伝った者として振り返って見ると、企画の最初から明確に提示され共通に認識されていたというより、試行錯誤的にだんだんと筆者自身の頭の中ではっきりしてきたものである。当初、「生態複合と生物多様性」あるいは「生物多様性をもたらす生態複合」といったテーマ(これは昨年12月に開いた国際ワークショップのタイトルであり、その意味については「科学」の1993年6月号および12月号に筆者が書いた記事を参照してください)がプログラム委員の間での共通認識としてあった。しかし、シンポジウムの準備、そして実際にシンポジウムを進めるにしたがって、上記のような、より統合的なテーマが明確になってきたように思う。生物多様性の変化が生態系・生物群集構造・生物間関係・集団構造など生態システムに及ぼす影響の解明は、"why" 問題、つまり「なぜ生物多様性を保全・回復すべきか」についてより明確な答えを与える。一方、生物多様性の創出・維持の要因・機構の解明は "how" 問題、つまり「いかに生物多様性を保全・回復するか」という問題に対する本格的な答えを与える。こうした認識を筆者は今回のシンポジウムを通じて持つようになった(実際、シンポジウムの最後のセッションで座長としてのまとめで以上の主旨のコメントを行った)。この認識が、上に述べた「生態学こそ生物多様性問題の核心に係わる研究分野」という確信の基礎になっている。

今回のシンポジウムは、国際生物学賞の記念シンポジウムを一部含んだものであった。受賞者の Edward O. Wilson 博士はたまたま生物多様性研究の創始者的な存在であり、その記念講演はシンポジウム全体にとってもびつたりの名講演となった。全体として質の高い講演が多かったと思うが、とくに海外から参加した C. Reynolds、J. Lawton、K. Bawa、S. Levin、M. Tokeshi、N. Eldredge、J. Kikkawa、などの発表、国内からも川幡佳一、甲山隆司、山村則男、山岡亮平、安部琢哉、井上民二の発表は筆者にとって印象に残る優れたものであった。

こうした優れた講演発表の密度の高さを経験した直後の感想として、上に述べた確信とは逆方向の確信も筆者の頭の中で芽生えてきた。「今後、Biodiversity 研究が生態学の新展開を促す」という確信である。

1993年度（平成5年度）京都大学生態学研究センター  
集中講義&セミナー募集要項

1. 課題

生態学における理論・実証インターフェイス

2. 目的と内容、講師

目的：「20世紀が物理学の時代なら21世紀は生物科学の時代」といったコメントを指導的物理学者が発表する時代となった。しかし、生物科学がサイエンスとして一層の発展を遂げるには理論と実証研究の「両輪」がともに進むことが今後ますます重要になる。マクロな生命現象を扱う生態学においては、幸い理論研究も実証研究に劣らぬ発展を当初からみてきた。数理モデルを用いる理論研究も次々と現われ、日本でも多くの研究が生まれている。しかし、これら理論研究は現実の系の一定の抽象化を意味する「モデル」に基礎をおくため、実証研究からの遊離という危険を常にはらんでいることは、どの科学分野にも共通する点である。従って、「理論と実証のインターフェイス」こそが肝要となる。

本コースの主な狙いは、(1)一人でも多くの人に、現代生態学の研究最前線の「面白さ」に触れて自分もそういう方面の研究にぜひ参入したいという気になってもらうこと、(2)研究を行なっていく上で基礎になる「実力」を養ってもらうことにある。この目的のため、講義とワークショップおよび質問アワーからコースは構成される。講義には、数理モデルの理解に必要な数学の解説も含まれる。

内容：トピック1 - 「進化生態・集団遺伝学のための数理モデル」

講師：山村則男（佐賀医科大学）

トピック2 - 「個体群・群集・生態系ダイナミクスの数理モデル」

講師：東 正彦（京都大学）

トピック3 - 「水域の群集生態学の研究」

講師：川端善一郎（愛媛大学）（ワークショップ）東 正彦 + 川端善一郎

トピック4 - 「陸上の進化生態学」

講師：安部琢哉（京都大学）（ワークショップ）山村則男 + 安部琢哉

3. 対象学生

大学院修士課程学生（進学予定者を含む）を主な対象とするが、博士課程学生や学部新3・4回生も受講可能である。

4. 実施要項

期間： 1994年3月22日～3月26日（午前中まで）

定員： 20名

場所： 京都大学生態学研究センター（滋賀県大津市下阪本4-1-23）

経費： 受講場所までの往復旅費、食費、宿泊費は各自負担。

5. 単位

京都大学生態学研究センターの院生には単位を発行する。他の所属の学生については、修了者には修了証明を出し、2単位相当の講義（演習）を受講した合格証を発行するので、受講学生の所属大学（学部）において他大学の講義（演習）をその大学（学部）の単位として認める制度が存在する場合は、受講学生各自が本実習を所属大学（学部）の単位に認めてもらう手続きをとること。

6. 受講願提出期限と送付先

公開セミナー受講願（募集要項とともに各大学に送付してあるが、必要な場合は下記に請求すること）は1994年2月15日（消印有効）までに下記まで送ること。封筒の表に「公開セミナー受講願在中」と朱書きすること。なお、本公開セミナーについての問い合わせがある場合は下記まで行なうこと。

送付先：〒520-01 大津市下阪本4-1-23 京都大学生態学研究センター 研究協力掛  
Tel. (0775)-78-0580 Fax. (0775)-79-8457

## センター員の紹介

東 正彦（ひがし まさひこ）（Masahiko Higashi）

温帯生態研究部門助教授

1983年8月 米国ニューヨーク州立大学 Ph.D.

生態システムおよび進化現象の数理モデルによる理論的研究

京都大学大学院（理学研究科生物物理学専攻）の修士のとき、最適捕食行動の理論研究を経験すると同時に、湖の付着藻類群集の構造と生産性に関する実験と数理モデルを組み合わせた共同研究に係わる中で、生態学への興味をもった。その後、博士課程に入った年、米国に渡りニューヨーク州立大学で情報理論とシステム科学の方面へ進み、「部分と全体の関係」というシステム論の中心問題に情報理論とファジー理論から取り組んだ。1983年に博士号を得た直後にジョージア大学に就職し、生態学研究所で主に生態系ネットワーク（とくに食物網、栄養動態、間接効果など）の理論研究を行った。その方面の研究の全体像を得るために「Theoretical Studies of Ecosystems: The Network Perspective」（M. Higashi and T.P. Burns 編著、1991年、ケンブリッジ大学出版）をまとめた。

その後日本へ帰り1988年に龍谷大学に職を得たところから、新しい交友の影響の下、研究の関心が生態と進化のより広範な問題へと広がった。システム生態学の理論研究を続けると共に、山村則男（佐賀医大）、中島久男（立命大）、安部琢哉（京大）氏らと「食物網・生態系への進化生態学的アイデアの導入」を試み、また山村氏と（例えば、利他行動やグループ形成における）進化的コンフリクトの（共進化ゲームによる）解消というアイデアを提示した。（ただし、これらもすぐれて「システムの」な問題を含んでいる。）この新アイデアは、安部琢哉、T.P. Burns（当時、京大）両氏を交えた共同研究において「なぜすべてのシロアリ種に真の（不妊の）ワーカ・カーストがないのか」という社会性進化の問題に一つの答えを与える理論に応用された。また、安部氏とシロアリの話、Burns氏とサンゴの話を同時に議論するうちに、「C-Nバランス」というアイデアに思い当たり、安部、Burns両氏と共同で、このアイデアに基づくシロアリ共生系やサンゴ礁共生系などコンパクトな系、および生態系・群集などマクロな系のオーガニゼーションに関する理論研究を展開してきた。この方面の研究の概観は「地球共生系とは何か」（東正彦・安部琢哉 編著、1992年、シリーズ「地球共生系」第1巻、平凡社）の中にまとめた。

現在、研究上の関心の中心は「群集・生態系（生態システム）の自己組織化」、「共生の生態・進化」、「種間関係の進化」、「共（システム）進化」にある。シロアリとサンゴへの関心は深まるばかりで、これとの関連もあって「生物多様性の生態・進化」および「生物活動の地球的インパクト」に関する研究にも強い関心がある。

研究内容を示すキーワード

理論研究、数理モデル、システム論、ネットワーク、自己組織化  
生態と進化、生態系と群集、  
ニッチ、共進化、炭素-窒素バランス、間接効果、進化的コンフリクト、  
シロアリ、サンゴ、共生、社会行動、生物多様性、バイオゲネシス

## バイカル湖研究の将来的展望と21世紀の陸水学

吉岡 崇仁・野尻 幸宏

名古屋大学大気水圏科学研究所・国立環境研究所

バイカル湖は、世界でもっとも深く、最大の淡水量をほこる湖である。その湖底には、遠い過去からの地球の歴史が残され、その豊かな生物相には、進化の軌跡が残されている。この湖の研究が世界に開かれてからまだ日は浅いが、日本バイカル国際研究計画協議会（日本BICER協議会、以下、BICERと省略）を中心に、日本でもいくつかのプロジェクトが進行している。バイカル湖は、生物系統学・陸水生態学・地球化学をはじめ様々な分野の研究の宝庫であり、学際的共同研究、国際共同研究は、陸水学の将来を方向づけるうえで非常に大きな意味を持つであろう。

本研究会は、このような認識のもとに、専門が様々に異なる研究者が集まり、国際共同研究の一環として、バイカル湖の研究テーマにはどのようなものが考えられるのか、また、その将来的展望は、などについて討議することを目的に企画された。研究会は、国立環境研究所において、9月23日から25日の3日間、バイカル湖で研究を行い、また、行おうとしている研究者13名（全員BICER会員）の参加のもとに開かれた。参加者の専門分野は、地球物理学、地質学、地球化学、生態学、生物進化系統学等におよび、会は有意義に進行した。討議の内容は以下の通りである。

## 1. バイカル湖研究の現状

まず、出席者が現在おこなっている研究の進行状況について意見が交換され、現状認識がとりまとめられた。

## 1) 環境変遷史（ドリリング）グループ

BICERとしての出資金による国際共同事業として、100mドリリングを行い試料を得ている。観測船による堆積物コアのサンプリングも行った。超長期的環境変動研究のための1000mドリリング事業を実現する目的で、科学技術庁振興調整費総合研究に応募している。

## 2) 水界構造・地球物理グループ

奥田節夫岡山理科大学教授を中心として、水温構造、湖流の研究を昨年来行っている。スイスの研究者との共同研究となった。文部省科学研究費の国際学術研究として1994年まで継続される。

## 3) 物質循環グループ

上記国際学術研究のサブグループとして、渡辺泰徳東京都立大学助教授を中心に、バイカル湖表層における一次生産をはじめ、食物連鎖に関する基礎研究が1992年から始まっている。その結果、光合成活性の変動や、ピコプランクトンを出発とする微生物ループの重要性が明かとなりつつある。また、バイカル湖では、水温などの空間的不均一性が大きく、攪乱による変化も大きいことから、水界構造と生物活動の関わりの重要性が指摘された。

## 4) 集水域グループ

バイカル湖周辺の森林・河川の調査が開始されている。関連研究として、モンゴルに関する国際学術研究が本年スタートした。モンゴルからバイカルに至るセレンガ川およびそこから湖内への物質輸送現象をトータルに捉えたいという構想がある。

## 5) 系統進化・生態グループ

アザラシ、カジカ類、ヨコエビ類の進化系統を、形態・アイソザイム・DNA分析により検討を進めている。カジカ類では、深湖底に生息するグループは他のグループと大きく異なっている可能性が示唆されている。その他、カゲロウ類、ソコミジンコ類、ハウネンエビ類、貧毛類、淡水海綿類の

調査が行われ、分類および進化系統の問題について検討している。ピコプランクトンについては、分子生物学的手法により、バイカル湖を含む、東アジアにおける地理的分布を把握検討している。分類学の面では、ロシアの過去のデータの整理が十分に行われていないので、今後、再検討しなければならない分野もあるとの報告があった。

#### 6) バイカル湖研究をとりまく現状

Diversitas JAPAN、Symbiosphere、GCTEなど生物関連のプロジェクトの概要・進捗状況について紹介がなされた。現状でも研究グループの範囲は広い学問領域にわたり、費取るの研究課題としてまとめたプロポーザルを作るのは困難な状況にある。実際の研究を進めるには、小さな規模で小回りのきく予算と、研究設備の充実に充てられるような大型の研究費の両方の獲得に向けた努力が必要である。また、研究分野によって必要とする予算規模も違う、等の意見が出された。学際的な組織をいかに構築していくかが、今後の大きな課題であろう。

#### 2. 現状で考えられる研究課題

将来の研究プロジェクトの内容について、以下のような例があげられた。

- ・バイカル湖のドリリングによる超長期的環境変遷史の解析
- ・湖・集水域系における物質輸送と生物・化学過程
- ・バイカル湖における生物種および生物間相互作用の多様性の解析

これら対し、それぞれいくつかの個別テーマが例示された。

また、物理、化学、地学、生物学分野の相互の連携が必要であることから、バイカル湖の物質循環と生態系維持に重要な役割をはたしている諸過程の相互作用の解明を目的とする観測キャンペーンを行い、物理観測・化学観測・生物観測を組織的かつ同時に行うことなどが有効との意見も出された。

#### 3. 将来展望

研究会では、現状報告や個別の研究課題等について、参加者の活発な意見交換があり、バイカル湖研究と日本の陸水学・陸水生態学の将来（21世紀の陸水学）との関わりについては、十分討議できなかった。しかしながら、バイカル湖が、生物進化の現場であること、日本の陸水を研究してきた研究者の多くにとって、海洋学的スケールの設備と発想が必要な場であることは、バイカル湖研究の充実が、将来の発展に大きく寄与することはまちがいない。研究費獲得のみならず、研究者人口を増す意味において、社会にアピールしていくことが重要であろう。日本BICER協議会が拠点のひとつとして、様々な活動をしていくことが期待される。

重要な研究課題や、魅力的なキャッチフレーズ・キーワードを考えつかれた方は、ぜひお知らせください。

最後になりましたが、本研究会は、京大大学生態学研究センターからの補助を受けて開催されたことを記し、感謝の意を表します。

---

## 1993年度公開実習報告

---

### 生物およびその起源物質の炭素、窒素安定同位体比の測定

杉本敦子・和田英太郎

京大大学生態学研究センター

11月15日～19日の5日間、生態学研究センター（大津）にて実習を行った。6名の参加者（うち5名が学生）が、当センターで稼働中の3台の真空ラインに分かれて分析の前処理を行なった。固体有機物の同位体比の分析には、真空石英管中で燃焼させて生成したガスを真空中で分離分取し精製するという繁雑な作業をとまなう。真空ラインの取扱は全く初めてという実習生を対象にセンターとしてはじめて行う実習であり、どのような手順で進めれば全行程を終了できるのか多少の不安もあった。スペースが狭くてたいへんであったとほとんど全員の実習生が感想文のなかで述べているように、実際に極めて狭く、劣悪な環境であるが、当センターの大学院生、松原、陀安両氏の協力を得て、大きなトラブルもなく無事に終了した。また、フィニガンマツ社の大堀氏の協力もあり、なんとか時間内に質量分析まで終了することができた。

最終日には同位体比をいかに応用していくかに関する講義を和田、杉本、中塚（名古屋大学大気水圏科学研究所）の3人で行い、安定同位体比が様々な研究分野で強力な武器になる反面、ある場合にはよく考えて徹底的にやるべきことをやらなければ定量的な解析は難しいことも理解していただけたと思う。安定同位体比の研究は地質学の分野で応用的研究が盛んに行われてきたが、最近では生物関係の分野でも生態学だけでなくさまざまな分野での応用が期待されている。これを反映して今回の実習に参加した方の分野も幅広く、安定同位体と言う共通の手法を通しての分野間の交流も将来的には楽しみである。以下に実習生の方々の感想をあげておきたいと思う。

地方にいるものはなかなかこうした先端的な技術に触れる機会がないのでおおいに勉強になった。反面、フィールドはかなり知っているのので、両方の知識を組み合わせればさらにテクニクの応用面は広がると思う。（柳井、北海道林業試験場）

化学etcに関する基礎知識が他の人に比べてほとんどないと言えるような状態で参加したのでかなり不安だったが、初めの講義で原理を説明してもらったのでなんとか最後までやっていった。法学の分野でも利用できないかと思わぬところに興味がでてきたことが今回の実習の思いがけない収穫だった。（東村、京大法学部）

全く初めての経験で非常に緊張した。サンプルをただ測って分析するだけでなく、そのサンプルについての実験意義など詳しく説明してほしいと思った。安定同位体はそのまま生物の情報になるものだと感じた。ただ、実際に自分が実験をはじめるときにどう利用するかなどしぼり込むことが重要であると思う。例えば植物のSIには情報が詰まっているのは事実であるが、環境要因などの外的要因による変化を除去することが困難な場合も多くあり、何ともはがゆいような気がする。（竹本、京大農学部）

最初は6人しかいないので余裕があると思ったが、実際に始めてみるとぎりぎりの人数だった。時間も予定が詰まっていたいへんだった。分取の方法が教えてくれる人ごとに違っていたので最初は困ったが、要は原理と注意すべきことを理解していれば良いわけで、終わってみれば自分なりに良く理解できたと思う。（安並、東京農大）

考古学の分野で最近関心の高まっている食性解析の内容を具体的に知るために参加した。分析の一番の山である気体の分取では苦労した。しかし最後まで緊張感が持続しデータを出すところまでたどり着けたことは収穫だった。（杉本、京大文学部）

## 京大大学生態学研究センター研究会のお知らせ

### 【海洋底生生物群集の生態学 - 個体の行動から群集へ】

日 時：1994年1月22日(土) 13:00 ~ 23日(日) 12:00

場 所：京大会館 京都市左京区吉田河原町15-9

海洋底生生物の生態学は、群集生態学を中心に進んできており、現在、行動生態学が隆盛を極めて  
いる陸上とは状況が全く異なる。これは群集の実験的操作が容易である一方、個体の行動の観察がむ  
ずかしいといった底生生物の特徴にもよるものと思われる。しかし、最近になり若手研究者を中心に  
底生生物の行動生態学的な研究や個体の行動を基礎においた種間関係の研究が芽生えつつある。この  
研究会では、個体と群集を両極とする様々なレベルからアプローチしている研究者が集まり、今後の  
海洋底生生物群集研究のあり方を模索したい。

#### プログラム：

1月22日(土)

13:30 雌雄の対立の起源、主として同時的雌雄同体について

遊佐陽一(京大・理・瀬戸臨海実験所)

14:30 フクロエビ類は“海の昆虫”か?

青木優和(筑波大・下田臨海実験センター)

15:30 藻食性貝類の活動リズムの種内・種間変異

高田宜武(九大・理・天草臨海実験所)

17:00 ヒバリガイモドキ帯におけるアクキガイ類の種間関係

阿部直哉(大阪国際女子短大・国際文化)

18:00 二枚貝床の動態と内在生物群集

岩崎敬二(京大・理・動物)

1月23日(日)

9:00 潮だまりの群集生態学

山本智子(京大・理・動物)

10:00 生息場所構造・生息場所選択・捕食：生息場所に依存した小型甲殻類の群集構造

松政正俊(岩手医科大・教養・生物)

11:00 総合討論

問い合わせ：〒570 守口市藤田町6-21-57

大阪国際女子短期大学国際文化学科 阿部直哉

TEL 06(902)0791, FAX 06(902)8894

### 【インドネシアにおける植物生態学研究の現状と今後の課題】

日 時：1994年1月28日(金) ~ 29日(土)

場 所：楽友会館(京都大学吉田キャンパス南：東大路近衛通東入ル)

西スマトラ、西カリマンタン、東カリマンタンと、インドネシアのさまざまな地域で熱帯雨林  
の現地研究が進められています。この研究会では、現在進行中の熱帯雨林の植物生態学関連の研究  
プロジェクトにかかわる話題提供をとおして、プロジェクト間、地域間の連携を考えていきま  
す。興味をお持ちの方の参加をお待ちしています。Sampai jumpa! (では、お会いするまで!)

プログラム：

1月28日（金）

- |       |   |                                     |
|-------|---|-------------------------------------|
| 13:30 | 西カリマンタンの植生と人間の影響                                    | 鈴木英治（鹿児島大学教養部）                      |
| 13:45 | 西カリマンタンの土壌  | ラハマン・ジュワンサ<br>（バンドン地球科学研究センター-LIPI） |
| 14:30 | 休憩  |                                     |
| 14:45 | 熱帯林アーキテクチャーの構成要素と動態                                 | 甲山隆司（京大生態学研究センター）                   |
| 15:15 | 熱帯林における生物的活動の空間分布                                   | 小池文人（島根大学理学部）                       |
| 15:45 | 休憩  |                                     |
| 16:00 | 西カリマンタンの熱帯多雨林におけるDryobalanops beccarii の種子落下量と実生の定着 | 梶 幹男（東京大学農学部）                       |
| 16:30 | オオバギ属Macaranga の多様性と生態                              | 野間直彦（京大生態学研究センター）                   |
| 17:00 | 熱帯多雨林におけるアオギリ科のScaphium macropodum の生活史             | 山田俊弘（鹿児島大学理学部）                      |

1月29日（土）

- |             |                        |                |
|-------------|------------------------|----------------|
| 9:30        | 西カリマンタンでの研究状況と今後の課題    | 鈴木英治（鹿児島大学教養部） |
| 10:00       | 西スマトラ州でのFBRT研究計画の現状と課題 | 米田 健（大阪教育大学）   |
| 10:30       | 東カリマンタンの研究の現状          | 渡辺隆一（信州大学教育学部） |
| 11:00       | 休憩                     |                |
| 11:15～12:00 | 総合討論                   |                |

研究会代表者：鈴木英治

問い合わせ先：〒520-01 大津市下阪本4-1-23

京大生態学研究センター 甲山隆司

TEL 0775(79)2948, FAX 0775(78)5792

## 大学共同ゼミナールのお知らせ

### 【第5回京都国際セミナー】

テーマ：生態学からみた安定社会

< 安定と攪乱 - 淡水域の生物群集から - >

日時：1994年2月10日（木）～13日（日）

（12日はエクスカージョンと講演会の予定）

場所：京都府立ゼミナールハウス（京都府北桑田郡京北町字下中）

京都国際セミナーは、総合テーマを「安定社会」として1989年度から10年計画で毎年1回行われているものである。第1～3回（第1期）は「安定期社会における人生の諸相」をテーマとし、第4～6回（第2期）は「生態学からみた安定社会」をテーマとして行われ、その第4回は「多様性の維持と促進 - タンガニカ湖の魚類群集から - 」というサブテーマを設けて行われた。今回は、人が作用を加え続けてきた淡水域に焦点をあて、そこにおける生物群集の実態、人為作用の内容や変遷との関係について討論を行う。

講演予定者と講演仮題：

- 長田 芳和（大阪教育大学）「日本の魚類の在来種と外来種」  
田 祥麟（韓国・祥明女子大学）「韓半島淡水域における魚類の移植や混入」  
中島 経夫（琵琶湖博物館開設準備室）「淡水魚の種分化と分布の変遷」  
李 三畏（台湾・行政院農業委員会林業処）「台湾における淡水域の利用」  
伴 浩治（京都府立西宇治高校）「京都府における淡水生物の諸問題」  
嘉田由紀子（琵琶湖博物館開設準備室）「琵琶湖周辺における人の暮らしの変遷と生き物」  
小山 弘道（大阪市立大学）「河川敷の植物 -- ヨシを例に」  
日比 伸子（橿原市昆虫館）「ため池の昆虫」  
芦谷美奈子（琵琶湖博物館開設準備室）「ため池の植物」  
曹 先紹（台湾国立大学）「水生生物の環境利用」  
ほか

問い合わせ：〒520-01 大津市下阪本4-1-23

京都大学生態学研究センター 遊磨正秀

TEL 0775(79)2948, FAX 0775(78)5792

#### トップダウンアプローチを目ざした人

三浦泰三さんをしのんで

三浦泰蔵さんが亡くなってすでに4ヶ月が過ぎた。私には大学院に入学して以来の付き合いでこわい先生でもあり、こわい上司でもあった。

私がM2の頃、三浦さんと同室になった。朝の遅い私が冬に研究室に行くとき部屋はすでに暖まっていた。朝の早い三浦さんは石炭ストーブを掃除し、石炭置き場の1階から3階の部屋まで石炭を運び、ストーブを焚いていたのである。「先生の来る前に学生が部屋を暖めるものだ！」と怒られたが、冬でも8時過ぎには研究室に来る三浦さんより早く出てくるなんて、私には“至難の青菜”である。冬の朝の石炭ストーブ焚きはずっと三浦さんの仕事であった。

大津臨湖実験所では三浦さんは私の上司であった。時々私が風都で休むと、「楯袖力が足らん」と幾られた。清和力で病気になるのなら医者などいらんわいと、私はプツアツ言っていたが、しかしそれにしても三浦さんは丈夫な人であった。本当に歳を取られるまでほとんど風布などひかず、たとえ風邪で熱があっても休むことなどない人であった。私などは、三浦さんがたまに風郷をひくと鬼の捜乱だなどと憎まれ口を言ったものである。

今年の4月に入院されて、人づてに三浦さんがかなり悪いらしいと聞いて、あの慎重な三浦さんがとオいた。そこにいたるまでには三浦さん自身きつと変調に気がついていたに違いない自覚症状があったに違いない。それにも関わらず、なるようにまかせたのではないかと思う。何がそのような心境にさせたのか、私には何い知ることにはできない。武集束湖、上海養魚池とトップダウンアプローチを目ざして、中国と日本を元気に往復していた三浦さんの姿がいまでも思いおこされる。

成田哲也（京都大学生態学研究センター）

# ----- information -----

## 公開講演会「鳥の眼からみた水辺の環境 - 日本とヨーロッパの比較」

1994年1月28日（金）に上記の講演会（主催：淀川におけるオオヨシキリ調査グループ）が開かれます。プログラムは以下の通りです。参加は自由、無料。来聴歓迎。

日 時：1994年1月28日（金）14：00～16：30

場 所：大阪市立大学文化交流センター大ホール（大阪駅前第3ビル16階、JR大阪駅から徒歩5分）

プログラム：

- 1 日本の水辺環境と鳥類群集 山岸 哲（大阪市立大学教授）
- 2 Present situation and conservation of the riverside and other waterside environments / ecosystems, as well as of their avifauna in western and central Europa（中西部ヨーロッパにおける河畔・水辺環境とそこに生息する鳥類の現状と保全） Andrzej Dyrz (Wroclaw大学(ポーランド)教授(通訳あり))

\*Dyrz教授は、ヨーロッパのヨシキリ類についての長年にわたるすぐれた生態研究で有名な方であり、近年は湿地の保全の分野でも活躍されています。

問い合わせ：〒669-13 兵庫県三田市弥生が丘6丁目

姫路工大・自然環境科学研/人と自然博 江崎保男

TEL 0795(59)2021, FAX 0795(59)2015

---

### 編集後記

- ・今年もとんでもなく忙しい1年でした。今年も1年間センターの活動をささえて下さった方々に感謝いたします。
- ・ニュース発行には筒井なおみさんに大変お世話になりました。また1000部を越すニュースの発送作業をしていただいたセンターの方々にもお礼申し上げます。
- ・来年A. S.長期海外出張のため、M. Y.氏が編集を担当します。また、次号よりセンターニュースはA4版になります。

(A. S.)

---

京都大学

**生態学研究センター・ニュース**の問い合わせ先

京大大学生態学研究センター・ニュース編集係

---